

『日葡辞書』に採録された食に関する語彙について  
第5報 供食、接待に関する語彙について  
松本伸子（女子栄養大）

目的 東北大学狩野文庫に架蔵される『南蛮料理書』を理解するためには、多面的な検討が必要であると考え、これまではルイス・フロイス『日本史』、アレシャンドウロ・ヴァリニャノ『日本巡察記』などを資料として、成立の推定を行ってきた。次いで調理方法の記述を検討するにあたっては、まず語彙の整理が必要であるところから、『日葡辞書』を資料として、収録される食に関する語彙を採集して検討することとした。

方法 資料の『日葡辞書』は、イエズス会宣教師が日本において聴罪、説教を行うにあたって必要とされる日本語習得のために長崎のコレジオにおいて編纂され、1603年に刊行された辞書である。中世から近世にかけての日常の話し言葉を中心に、広汎な分野に亘る語が採録されている点、当時の辞書類が漢字を中心とした字書、歌の用語を収めた辞書の他には存在しなかった中であって、生活用語を研究するうえで極めて有用な資料である。岩波書店発行の和訳『日葡辞書』を底本として、それに収録される食に関する語について全てを採取し、分類して、今回は供食、接待に関する語について検討した。

結果 食に伴う語は供食の時刻、美食、粗食の別、宗教や旅に係わるものなどが広範に採取され、食事を世事といい、食事の時刻を神事というなど、食を重く捉えていたことが推察される語もみられた。宴会に関しては振舞いということが一般的で、会席については集会する場とあって未だ食事の形式を示す語にはなっていない、落ち着きについてもあるところから到着することとなっている。また懐石の語はみられなかった。酒についての語が多く、酒宴での盃のやりとりなど実際に即した語が採取される傾向がみられた。